

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1792200188		
法人名	一般社団法人 ケア・クリエイト		
事業所名	グループホーム野の花		
所在地	石川県白山市今平町111番地		
自己評価作成日	令和8年1月19日	評価結果市町村受理日	令和8年4月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 バリアフリー総合研究所		
所在地	石川県白山市みずほ1丁目1番地3		
訪問調査日	令和8年2月6日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご利用者様のできることを把握し、日々の心身の状態を考慮しながら、そのできることを日常生活の中で活動として実施している。職員がなんでもするのではなく、できる限り声掛けや促しを行い、また個々の能力に応じてできる環境を整え、その人が持つ力を最大限に発揮しながら、グループホームでの社会生活を営むことができるよう支援している。
またデジタルテクノロジーの導入により、次世代介護を実践し、ご利用者様の尊厳を保持・個別ケア・健康管理・リスクマネジメントの向上に取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

・ホームは「その人らしい生活をその人らしく。あたりまえの日常をあたりまえに。普通の暮らしの毎日こそが幸せ。(要約)」を理念とし、今日の過ごし方は利用者本人が決め、職員はそれをサポートする姿勢で日々臨んでいる。
・ホーム恒例の夏祭りは、利用者家族をはじめ地域住民や福祉事業者やボランティア団体に、今年は社会奉仕団体や民間企業の参加で益々盛況となり、食事は一般家庭と同じくスーパーの購入食材で都度献立を考え、調理はソフト食にもこだわる美味しさファーストの料理に、利用者の行きたい所に行く外出企画が毎月あり、またホーム運営の中核をなす6委員会活動には全職員がいずれかに所属し、利用者本位のケアとなるよう取り組んでいる。
・生成AI機能を活用した介護計画作成、入浴はリフト付き浴槽もあり使用毎に洗浄と湯はりをし、トイレには入退室時刻・個別識別・異常検知・排泄情報等の利用記録システム、睡眠は脈拍・心拍・睡眠・覚醒・起床・離床等の管理システムに見守りカメラもあり、今年度は移乗サポートロボット、移乗用スライディングボード、排泄サポートリフトを導入しているなど、職員の負担軽減と利用者ケアの質の向上に向け、次世代介護の実践に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
60	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	67	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
61	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	68	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
62	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
63	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:40,41)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:53)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	71	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	72	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
66	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	グループホーム野の花 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ユニット会議の際や、個別面談の際に管理者が職員に伝える、秋まつりなどの機会に掲示する等により共有し、実践につなげている。	ホーム理念「・その人らしい生活をその人らしく・あたりまえの日常をあたりまえに・普通の暮らしの毎日こそが幸せ(要約)」は、法人理念「未来の幸せを創造する」を基に掲げたもの。重度化や終末期になっても食べられるのなら様々な工夫を施し、1日でも長くそれがあたりまえの日常になるよう取り組んでいるなど、理念をぶらさず、最善のケアとなるよう日々取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	地域で活動している団体からの慰問を通して、地域住民との交流を深めている。また秋祭りには地域住民・ボランティアも含め、130名程の催しとなり、地域とのつながりを徐々に深めている。地域の文化祭・防災フェスティバルへの参加、地域住民の日常的な訪問など付き合いは深まっている。また回覧板を近隣宅に届ける際にも利用者様と一緒に行くなどし、地域での生活を維持している。	恒例のホーム秋祭りは、利用者家族、地域住民、地元ボランティア、福祉事業所以外にも、今年は社会奉仕団体や民間企業の参加もあり、今後は子供も含めた世代間交流にもなるよう想定している。ほか地区文化祭に利用者作品の出演、消防署主催の防災イベントでは防災食をもらい、地区の福祉施設連絡協議会の会員でもあり、今年は徘徊高齢者を保護したことで徘徊高齢者ネットワーク活動として感謝状を頂いている。利用者が地域とつながりある暮らしができるよう、今後もホーム自体が地域により根付いて行くよう取り組む方針である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて	認知症相談窓口の開設・相談援助や福祉避難所の登録、徘徊高齢者ネットワークの参加などは実践しているが、本来事業所がもつ力を十分に活かしている状況ではない。今後、地域住民向けの広報誌など		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定例日に運営推進会議を開催しているが、事業報告がメインとなっており地域住民の声を引き出すことができず、施設運営に活かすことができていない。参加者の声を十分に引き出し、事業運営に活かすことができるよう取り組んで行くことが必要と考える。	会議は偶数月に、地元民生委員、地域包括と市担当課職員に、契約時に順に参加して頂けるようお願いしている利用者・家族の構成で、入退去数やサービス状況、行事案内や今後の法人動向等を報告している。参加者からは他施設の運営状況も教えて頂いて参考にさせて頂いてはいるが、まだまだ有効な取り組みになっていなく、今後はさらなる会議の充実化に臨む方針である。	会議議事録を家族にも送付や、玄関にも常置するなど、ホーム運営状況をより透明化されることも期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	能登半島地震避難者受入や新規事業への取り組み、GHの社会福祉法人への事業譲渡・新規事業の適正な運営方法など市町村担当者と連携をとり対応している。	市担当課には、運営推進会議にてホームの現状・実情を伝え、5年前の開設前から指導や助言を頂いており、コロナ禍ではマスクや手袋等のほか、福祉避難所としてもポリエチレンエプロンやガウン、手袋、消毒剤等の供給を受け、今年度は同敷地内に建設する別事業所開設に向けての補助金申請をはじめ、様々な指導や助言を頂いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に対する職員アンケート・施設内研修の実施・不適切事例の共有を実施し、身体拘束や不適切事例に関する理解促進をしている。身体拘束は実施していないが、スピーチロックやドラックロックに該当すべきものがないか、日々客観的にケアを見直し、委員会内で検討している。	身体拘束の正しい理解は、年間研修計画に虐待・拘束委員会による研修を毎年組み入れ、外部の関係研修に参加した職員からも報告の場を設け、厚労省指針に沿った虐待防止サンプルアンケートも実施し、その結果を職員情報共有アプリや職員会議で公表し気付き等を促す機会を設けている。本人・家族の承諾を得ての居室に夜間用見守りカメラ導入、介護拒否対応、入浴後の衣服選び等々、運営適正化委員会が主となって、実際に起きた問題や課題を、皆でその糸口を探しながら解決・改善に向け取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止に対する職員アンケート・施設内研修の実施・不適切事例の共有を実施し、身体拘束や不適切事例に関する理解促進をしている。虐待事例は発生していないが、虐待と疑われる不適切事例に該当すべきものがないか、日々客観的にケアを見直し、委員会内で検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	教材提供により、職員の知識向上を図っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に説明を行い、その後不明点等あれば都度対応している。他、介護保険料改正時には文書にて案内し、不明点の問い合わせなどがあれば都度対応することとした。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月の行事計画は利用者の意向を反映した計画になるよう取り組んでいる。 入浴時など職員と1対1になれる時間などにゆっくりと傾聴することで、日常生活の中で意見・要望を表現することができるように心掛けている。そして、その意向を反映できるように努めている。	利用者とは、今どうしたいのか何を求めているかを察せられるよう心がけており、訪問家族も多く今は居室で面会も可能。また法人代表者の携帯に連絡やメールも多く、今はグループ会話アプリも設けている。利用者の声で始めた移動スーパーが毎週来るのも好評で、職員が連れて来るペット犬も癒しになっている。今年は、回転寿司で家族と待ち合わせたり、看取りケアの方と酸素ボンベカート付きでファミレスでスイーツを味わったり、退院後寝たきり状態の方には家族と好きな歌手のDVDをベッド脇で一緒に観たり、枕元に家族アルバムを置いてもらうなど、今後も利用者や家族の意見や要望をできる限り実現させて行く方針である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議や委員会活動、行事計画の立案、居室担当制、個別面談、意見提案書の提出などにより聞く機会を設け、反映させている。また運営適正化委員会にリーダーのみならず、一般職、パート職員も参加し、現場の意見を運営に反映させることができるよう取り組んでいる。	職員の意見や提案を聴く機会は、2ユニット合同の全体会議と、法人代表・各ユニットリーダー・業務改善推進者で構成の運営会議が毎月あり、決済や伝達事項等は申し送りや業務・介護内容等を入力している各ユニットのタブレットで共有を図っている。また全職員が行事・広報、褥瘡・排泄・栄養管理、感染対策・事故防止、虐待・身体拘束廃止・認知症ケア推進、防災、運営適正のいずれかの委員会に1年任期で所属しており、職員の意向や提案が直接ホーム運営に関わる仕組みとなっている。今年度も職員業務の負担軽減とケアの質の向上を目的に、居室見守りカメラを2室から4室に増やし、移乗サポートロボットや移乗用スライディングボード、排泄サポートリフトを導入している。パート職のユニットリーダーもいるなど、利用者にとって何が必要かを役職関係なく、また経験者・未経験者も問わず、全職員で協議・検討をしながら取り組む姿勢で日々臨んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別面談や日頃のコミュニケーションを通じて、職員のニーズを把握し、その改善に取り組むなどすることで職場環境の整備を行っている。また所属する委員会に関連したことや本人の意向を確認しながら外部研修の参加を促進している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部・内部研修への参加や、OJT、個別面談を通して育成している。個々の職員の能力や興味・感性に応じて参加研修を提案し、参加促進している。代表者が管理者を担っており、平時より事業所にて業務に当たっていることより、職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握している。日頃より入居者様へのケア方法を現場で指導したり、法人内外の研修を受ける機会を確保しスキルアップ・キャリアアップできるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス連絡協議会への参加や介護福祉士会に参加し意見交換している。また林中地区福祉施設連絡協議会に参加し、交流をはじめている。今後も参加できる機会があったら、積極的に行っていきたい。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前のアセスメント時に、本人の意向を確認し、サービス調整を実施することで、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。また家族や利用しているサービス事業所の職員より情報収集することでその人らしさの把握に努め、本人の課題解決に向けたケアに活かし、関係づくりを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前のアセスメント時に、ご家族様の意向を確認し、サービス調整を実施することで、関係づくりに努めている。また必要に応じ入居者が同席していない場で意見・要望・不安なことを聞き、信頼関係の構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前のアセスメント時に他機関との連携が必要とされることを踏まえ、ご本人様及びご家族様と調整している。必要に応じて医療をはじめ、他機関と連携し支援ができるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理・洗濯・掃除などの家事に参加していただいたり、他利用者ともちつもたれつのかかわりを築くことによりご本人様の役割構築を行っている。機会を見つけては感謝の気持ちを伝えるようにすることで、介護される一方の立場でないことを利用者自身が認識できることがよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍においてもご家族様にも感染対策に努めていただき、面会を継続してきた。ご家族様には人のみでなくペットも含まれるものと捉え、一緒に暮らしていたペットも面会に来て、ご利用者様、ご家族様、職員、みんなでもに支えあっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	筆筒や写真、ぬいぐるみ、遺影などその方にとって思い出の深いものをご入居時にお持ちいただいたり、職員との会話の中で大切にしてきたなじみの人や場所の話題を出すことにより支援している。またご友人の面会なども頻繁にあり、人間関係も継続されている。	利用者には地元の方が多く、家族・親族以外にも友人やカラオケ仲間、自宅近所の方などが訪問しに来てくださる事が多く、職員も家族のようにお迎えし、また来てもらえるような接遇に努めている。また利用者との外出先も、その方がよく行っていた総菜を選べる飲食店や回転寿司店、道の駅などに出向いたり、馴染みの道や場所に少し遠回りをして立ち寄りなど、その方の個別の関係維持に努めているが、家族と連携してどこか楽しい所に行く支援までには至っておらず、今後の課題としている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者様同士の社会関係構築を支援することが介護職の仕事と捉え、ご利用者様の仲立ちをすることで関係構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後に介護相談に来られた際に、延命についてともに考えたり、医療依存度が高くても入居できる施設を探すなどを行っている。他施設へ入居された後に、そこでの生活状況を伺ったりしている。また支援終了されたご家族様へ秋祭りのご案内をお送りし、ご参加いただき、交流を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご利用者様同士の会話や職員との会話の中から思いを把握するように努めている。また日頃より職員に思いを表出することができるよう、ご利用者様との信頼関係構築に努めている。	夜中にお腹がすいた時はお茶やおやつを食べてもらったり、お腹をたたくとそれはトイレの合図であったり、ご飯の支度を始めると台所に来られるので、そのまま味見してもらい調理の話題でお話しをするなど、思いに沿ったケアを心がけており、時には本人が言っている事とと思っている事が異なる場合もあるが、最初はまず傾聴する事を基本とし、利用者個別の普段からの行動パターンや兆候を基に、様子を見ながら今現在の本当の思いを把握し、またその思いにも応えられるよう支援している。現在、6時間以上5分おきに行動や感情を記録し、その観察結果をグラフやマップ化してケアの向上を図る取り組みも実施している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人様及びご家族様より生活歴について話を聞いている。日頃の生活場面で表出されたキーワードをご家族様の面会時にお聞きするなどし、その人らしさの理解を深めるきっかけにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	記録や申し送り、職員間のコミュニケーションによりご利用者様の心身状況および生活状況の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日常的なコミュニケーションのなかで職員が意見を申し出したり、面会時にご家族様から意向を確認したりしてモニタリングを行い、介護計画を作成している。	入居当初は、ホーム生活に慣れて頂くことを最優先に、現在の症状や身体機能に即してホームでできるケアを主体に、短期目標を半年に、長期目標を1年に設定して見極めを図り、その後は1年更新で進めている。また県の補助申請事業の活用で、生成AI機能を活用したケアプラン作成にも着手しており、食事、排泄、身体能力等の日常的ケアの仕方や方針を主体に、本人のしたいことや好むことを目標設定にし、個別性を高めた立案と実行につなげている。今年度は、虐待により他施設から移行してきた利用者には、本人の不安が解消され、ここでの生活に安心感を持って頂けるよう、あわてず、あせらず、根気よく、本人に沿った食事やケアの工夫に努め、今は回復されている事例もある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活状況及び心身状況とその対応を記録し、情報共有を行い、モニタリングに反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状況により通院付き添い支援や入退院時の連携、薬局との連携、往診、訪問看護ステーションとの連携などをおこなっている。また傾聴ボランティアの活用によりより利用者の思いを引き出すことができるよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	施設の秋祭りや地域の文化祭を通じ、地域住民と交流を通じ、地域と協働し利用者を支援していくことができている。多くの地域住民の秋祭りへの参加、文化祭や防災フェスティバルなどへの入居者様の参加により地域住民との交流が多く、地域全体で利用者の豊かな暮らしを支え、地域と楽しく過ごすことができるよう支援できている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設の往診医と連携しながら、受診が必要な場合は本人の希望を大切に、なじみの医療機関に受診するなどし、適切な医療を受けられるように支援している。	主治医は、入居前からの通院先でも、月2回訪問の元精神科病院の内科医で在宅療養支援医療のホーム提携医でもかまわなく、通院や外来受診の場合は基本家族に状況報告書をお渡ししてお連れして頂いているが、事情によっては職員が連れ添ったり、症状次第では受診に同行することもある。また訪問看護事業所とも提携しており、提携医と同様24時間受付で、症状次第では訪問して緊急性にも応じて頂いており、薬局とも配達して頂いた際に個別仕分けや薬事相談にも応じて頂いている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	提携先の訪問看護ステーションと日常的に連携をとり、日々の状態の変化に応じた対応及び異常の早期発見、早期対応に取り組んでいる。また医療保険の訪問看護実施時には他の訪問看護ステーションにも協力を得て、適切な看護が提供できるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時に情報提供書を送ったり、退院時に状態確認のアセスメントに伺ったり、カンファレンスに参加したりしながら情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化した場合の説明を実施。また終末期などにおいては必要に応じて医師を交えて10を行うなどし、方針を共有し、チームで支援している。	入居時に、医療措置を要せず希望があればここが終の棲家になる方針を本人・家族に伝え、また近郊の終末期医療がある病院と介護老人福祉施設への移行も可能で、入居継続・入院・転居等、都度、揺れ動く家族の気持ちに寄り添い、いついかなる方向にでも納得の行く終焉となるよう取り組んでいる。寂しくならぬよう絶えず声かけし、少しでも長く経口摂取ができるようないろいろな形態に工夫する支援をしており、これまで家族が泊り込みの看取り事例もある。今年度は、食事や服薬を拒否されるもいろいろな手伝いをしたがる方がおり、無理に頑張らせず、その方らしい時間を尊重するケアに努めた事例もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の連絡体制を整備し、迅速に連携が取れるようにしている。		
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	緊急時の連絡系統を明確にすることで体制を整備している。	けが・転倒・窒息・意識不明等の対応マニュアルは、現在ホームに即した内容になるよう見直しを図っており、職員アンケートでは誤嚥・窒息対応への不安などもあり、今の利用者に起こりえると思われる現実的な研修会を実施し、また運営適正化委員会も、そうした学習の機会に向けた資料作りとともにマニュアルの見直しにも着手している。日頃は、法人代表者とユニットリーダーが通常の実務を通して、随時、職員個々の能力に沿った個別指導研修もしており、また希望の外部研修があれば参加を奨励している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	協力医療機関については、緊急搬送時に受け入れを実施していただいている。	協力医療機関には提携の在宅療養支援医療のホーム医と訪問看護事業所のほか訪問診療可能な歯科医院があり、また近郊の終末期医療がある病院と介護老人福祉施設とは災害時緊急受け入れ契約を締結しており、利用者の状況に応じた支援体制が確保されている。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	各ユニットに夜勤者が配置されており、2名で連携しながら対応できる勤務体制になっている。	夜勤者2ユニットに1名ずつ計2名の夜間体制で夜間専任職員もいる。マットレス下のセンサーで脈拍、心拍数、睡眠・覚醒、起床・離床等の介護見守りシステムとトイレ見守り管理システムに、本人・家族から承諾を得て居室に設置している夜間見守りカメラも4室あり、事務所のパソコンとスマホにて3時間置きの睡眠状態を確認し、夜間の体調変化や急変に万全を期すとともに業務負担軽減を図っている。また管理者、提携医、訪問看護事業所にはいつでも連絡可能となっている。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルにより周知している。またLINEWorksの導入により、災害発生時などは職員全体で一斉通知ができるよう体制を整備している。	防災マニュアルはあるもののホームに即した内容までには至っておらず、消防署員立ち合いとホーム独自で、利用者も駐車場や施設内の地域交流室に退避し、防災機器の操作や初期消火・通報・退避等の一連の避難行動や役割分担を確認する年2回の避難訓練の結果を踏まえ、現在、防災委員会が見直しに着手している。今年度は断水を想定し、排水設備が使用不可の場合のポリマーを活用したトイレ使用、チラシと食品用ラップで作った皿でのアルファ米試食等々、管理者が修了したDMAT研修やグループアプリを活かしながら情報共有や災害意識向上を図っている。	災害対策には限りがなく、引き続き、より現実的な対策構築に向け、取り組まれることを期待したい。
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	防災マニュアルを整備するとともに、一定の備蓄を備えている。また福祉避難所となっている。	防災品として、敷地内にある井戸水の貯水槽のほか、ポータブル発電機にバッテリー、ソーラパネル、ラジオ付き懐中電灯、ヘルメット、ビニール風呂敷に、穴の空いたシーツも応急用のおんぶひもや担架代わりに使用可能として残し、備蓄品にはポリマーや衛生介護用品の在庫に、職員分も含む3日分の飲料水ペットボトル、栄養補助食品等を整備しており、今年、同敷地内で開設する別事業所とともに、さらなる補充を予定している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄などプライバシーに関連する声掛けは、できるだけ他者に聞こえないように配慮している。	人権尊重や自尊・羞恥心への配慮は、褥瘡・排泄・栄養管理と虐待防止・認知症ケア推進委員会が主体となり、実践に即した理解や周知に努めている。ほぼ1日塗り絵で過ごす方がおれば、一晩中ゴミ拾いと就寝を繰り返される方もおり、車椅子を押したり食事介助もしてくれる方には外出先でも手伝ってもらい、仕事でここに来ていらっしゃる方にも手伝ってもらい、仕事でここに来ていらっしゃる方には洗濯物たたみやおしぼり巻きをもらい、またその方がいた方言でケアをさせて頂いてる方もいるなど、利用者が持つ本来の人柄や今の症状、歩んで来られた人生など、個々の個性を尊重したケアとなるよう取り組んでいる。	
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常的に話を聞く機会を設けることで、ご本人様の思いを聴き、支援に生かすようにしている。特に入浴時などはゆっくりと話すことはできるため、思いを聴くようにしている。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご利用者様個々の生活のペースやその日の心身の状態に合わせて支援している。テレビを観ている方、塗り絵をされている方、家事を行われている方など、個別性に合った生活を送ることができるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整髪や衣類の選択を一緒に行うなどしている。		
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常的な調理において皮むき、大根おろしづくりなどの下準備、食材カット、盛付、食器洗いや食器拭きなどをしていただいている。さつま芋や里芋の皮むき、梅干し作りなど見当識に配慮した取り組みを実践し、楽しく季節を感じるができるようにしている。またおやつレクや調理レク、行事食などを実施をし、日常的に季節の食材を利用するほかにも、イベントとして食事を楽しむことができるよう支援している。	献立は一般家庭と同じく都度考え、食材はスーパーで購入だがお裾分けもあり、今日は何んな料理が良いかを利用者にも聞いている。仕度が始まると寄ってくる方々がおれば、下拵えや食器洗いをしてくださる方もおり、職員に調理師や管理栄養士もいる美味しさファーストの料理は、ゼラチンや寒天、正月にはマシュマロゼンざいや肴取りの方にムースの餅を提供するなど、ソフト食にもこだわっている。外食も人気店やフードコートに行ったり、お好み焼きは素材作りから楽しみ、お節は個別に小さな重箱盛りで、雛祭り、七夕、ハロウィン、クリスマスは全員帽子をかぶり総菜バイキングなど行事料理も豊富で、食事時間も必ずしも皆と一緒にではなく、早くても遅くても、居室で摂られてもかまわない。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量の記録を行い摂取状況を把握している。またご利用者様の状態に応じ、様々な食事形態の提供、主食量の調整などを個々の咀嚼・嚥下状態及び健康状態に配慮し支援している。また必要に応じ栄養補助食品の提供を行ったり、栄養強化のおやつを提供したりしている。		
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛け・介助を行い、口腔ケアを実施している。その際、できる限りご本人様の残存機能を活かして実施することができるよう声掛けなどを行い実践している。		
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々のご利用者様毎の排泄時間や排泄の合図となる動作を把握することにより、個々のご利用者様に応じた時間に声掛けしトイレ誘導を行ったり、その合図を見逃さないよう見守りし、そのタイミングでトイレ誘導を行うことで自立に向けた支援を行っている。	全利用者のトイレ入退室時刻・個別識別・室内異常検知・排泄情報等のサニタリー利用記録システムで、羞恥・自尊心の保持とともに、適切誘導時間や介助の仕方の統一を図っている。便秘や頻尿等、生活習慣にズレが生じた時は、何故崩れたのか、その原因に基づいて、水分や食物摂取調整、職員間で役割負担調整を図り、薬剤調整とともに普段の暮らしの中で改善や維持に向け取り組んでいる。	
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事・水分摂取量と排泄状況を踏まえ、食事メニューに水溶性・不溶性食物繊維をバランスよく組み込むなどの調整を行ったりしている。また医療職と連携し、排便コントロールを実施している。		
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	本人の意向に合わせて、時間や順番の声掛けを行っている。入浴拒否がある場合は時間をおいて声掛けしたり、翌日にお声掛けするなどし対応している。また数種類の入浴剤をご用意し、入浴を楽しんでいただいている。	浴室は、広めの一般浴槽のユニットと、立ち上がりが困難な方向へのスライド式リフトがあるユニットの2ヶ所で、日曜以外の午前中に両ユニット合わせて6人の方々に、週2回以上を目安にご利用頂いている。使用毎に浴槽洗浄と湯はりをし、豊富な入浴剤を都度選んでもらい、今年は柚子が不作だったため、季節湯は代わりに酒風呂にもしており、また介護負担軽減を目的にお湯と泡を切り替えられる泡シャワーも導入している。職員と2人だけで過ごす湯けむりの中、他愛のない会話で盛り上がりたり、本当の気持ちに気づいたりすることも多い。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	眠りスキャンを導入し、個々のご利用者様の睡眠状況を把握し適切な支援に取り組んでいる。個々のご利用者様に応じた室温や照明・寝具等を調整し、安心して眠ることができるよう支援している。		
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬は正しく服用できている。また薬事情報を職員の目に留まるところにおいておき、情報共有に努めている。		
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	月1回の外出(夕食)レクにより気分転換を図っている。また誕生会や個別レクリエーションを実施により喜びや楽しく過ごせる機会をつくっている。また日常的な家事に参加していただくことで役割の創出を図っている。		
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出希望があれば、近所に散歩や回覧板回しなどに行っている。	コロナ禍では自粛を余儀なくされていたが、今は毎月行きたい所をお聞きして、インフルエンザが流行した8月以外は感染対策を講じながら繰り出しており、今年度は花見やバラ園、総菜を選べる飲食店や家族と待ち合わせをした回転寿司、犀川沿いや海を見れる高速パーキングや道の駅、寺院や博物館等々に、また帰りに立ち寄る人気店も楽しみになっている。落ち着かない症状が伺えた場合も気分転換に個別にお誘いしており、看取りの方と酸素ボンベカート付きでファミレスでスイーツを味わうなど、限られている時間の中で、普段行けないところやできないことをする支援に取り組んでいる。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在お金を所持している方はいないが、週1回移動スーパーが来園し、個々の希望のものなどを購入することができる支援を行っている。		
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	はがきや手紙、年賀状、荷物(誕生日プレゼントや衣替えの衣類など)などが届いたら本人にお渡しし、必要があれば読み上げたりしている。また携帯電話を持っている方には、電話を受ける・掛ける支援を行い、施設電話にご家族様より電話があった時は取り次いだりしている。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	照明・換気・音量などご利用者様に適宜確認しながら調整している。またご利用者様と共同で季節感を感じることができる壁面制作を毎月行い、掲示することによりご利用者様が居心地よく過ごすことができ、またご利用者様と共に来園者をもてなすことができるようにしている。	施設は、玄関ホールを中央に、両側に洋風ユニットと自家菜園や神社が見える和風ユニットがある横長構造で、その日の天候に合わせて窓開け換気や消毒・除菌、温度、湿度、照明等を調整し、感染対策と快適空間作りに努めている。それぞれ中央側にキッチンがあり、調理を始めると美味しい匂いが立ち込め、今日の料理を確かめに来る利用者もいる。高さ調整可能なテーブル3脚と炬燵兼用テーブルもあり、塗り絵や洗濯物たたみ・おしぼり巻きに没頭される方々、飾り付け作品を作ったり、両ユニットにわたり役割を持っている方もおり、今年は外出自粛をしていた夏に、職員家族がメンバーでもあるウクレレ演奏で、歌とフラダンスで楽しませてもらっている。また中央通路に訪問者向けに、外出先や行事でのスナップ写真を掲示しているが、写っている自分を確認するなど利用者にも喜ばれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	談話コーナーと食事のスペースを分けし、その人の気分に応じて過ごすことができるよう工夫している。		
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご自宅からなじみの筆笥やご家族の写真、愛用のぬいぐるみなどを持ってきていただき、安心できる環境を調整している。	全室が洋室で、マットレスの下に睡眠状況と起床・離床等の管理センサー付きのベッド、6色から選択のカーテン、チェスト、各室色分けの壁紙に鏡付き洗面台が備え付け。また本人・家族の了承のもと見守りカメラ設置の居室もある。持ち込みには先祖の遺影、家族写真、収納ボックス、使い慣れた電気毛布、家族写真がプリントされたクッションやひざかけ、枕元に家族アルバムを置いている方、CDラジカセで好きな歌手を聞く方もおればクラシックに興じる方、ぬいぐるみの持ち込みも様々で、皆1日のほとんどをリビングで過ごしていつも、移動スーパーが来たら必ずひ孫にあげるお菓子を買って帰る方もいるなど、自分のライフスタイルを持っている方が多い。	
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ご利用者様の状態に応じて表札を掲げたり、居室の雰囲気を変えたりすることで認知症の状況や心身状況に応じて安全に自立した生活を送ることができるよう支援している。		